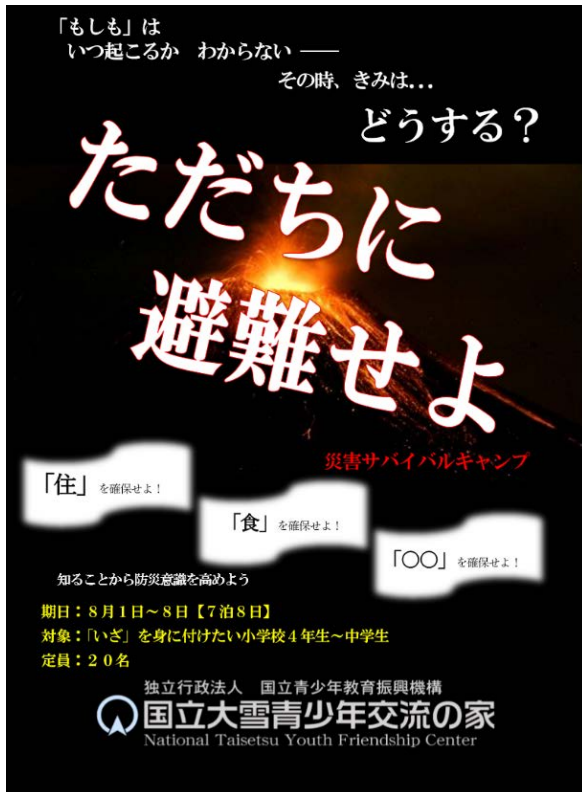


○令和元年度教育事業

「災害サバイバルキャンプ」(R1.8.1 (木)～8.8 (木))



◆目的

自然の雄大さや美しさとそれと隣り合わせの恐ろしさを体感するとともに、災害時の避難所生活を疑似体験し、その条件の中でよりよく生活していく知識・技能を身に付けるとともに、災害への日常的な備えと緊急時の対応について学ぶ。

◆参加実績 (募集 20 名)

参加 17 名

・小学生	13名
(4年生)	6名
(5年生)	7名
(6年生)	1名
・中学生	4名
(1年生)	2名
(3年生)	2名

※参加地域～石狩管内～7名
空知管内～1名
上川管内～7名
胆振管内～2名

◆プログラム

①日目 開校式・キャンドルの集い

これから7泊8日を共にする仲間と出会い、お互いを知り合う活動と、班決めや注意点などの事業オリエンテーション、また、これからのキャンプでできることになりたいことなどの目標の共有を行った。

②日目 噴火の足跡を辿ろう (上富良野フィールドワーク)

特定非営利活動法人 環境ボランティア野山人 井上 文雄 氏
自然の美しさと背中合わせにある「自然の力」を感じるために、十勝岳噴火の足跡が残る8か所を、ガイドの案内を受けながら回った。実際に川や土のpHを確かめてみたり、被害の大きさの様子がわかる場所を見学したりするなどの活動を通し、火山の威力や自然の豊かさに驚いていた。



③日目 避難所生活体験

北海道赤十字看護大学教授 根本 昌宏 氏
「災害って、どんな種類があるの?」「避難が必要な災害は?」などをみんなで話し合った後、災害時の避難所運営に必要なもの「T (トイレ) K (キッチン) B (ベッド)」の観点に沿って、実際に避難所作りを体験。また、この日から実際に3日間の避難所生活をスタート。ダンボールがこんなに色々使えるのだということ、集団で暮らすことの難しさ、水の重要性を感じていた。



④日目 活火山の現状を知ろう (十勝岳登山)

十勝岳ジオパーク推進協議会 佐藤 雅喜 氏
現在も噴煙を上げている火口付近まで、登山道中にある噴火の跡を見ながらの登山。鉱物による石の色の違い、火山噴火を知らせる情報システムなどの説明も聞き、興味津々の子ども。登山が初めての子もいたが、ゆっくりと、でもしっかりとした足取りで、励まし合いながら登ることができた。



⑤日目 ライフラインの確保（人命救助・水・電気）

大雪消防組合美瑛消防署 古川 孝 氏

日本技師会 エンジョイサイエンス研究委員会 人見 美哉 氏 他5名
「いざ！」という時に役立つ知識を知り、「人命救助」「水」「電気」の確保に焦点を当てて実践。身近なものを使った浄水実験では、泥水がきれいになるのを目の当たりにし、目を輝かせていた。また、食事はできるだけ水を使わないようにしながら、ガスコンロでの調理を行い、みんなで食べた。



⑥日目 自衛隊の救助体験

3日間の避難所生活を終えたところで、「被災者」から少し視点を変え、支援された側の気持ちを知ろうと、自衛隊に救助要請。一緒にテントを建てたり、炊き出し体験を行ったりした。お風呂に入れない辛さも味わっていた子どもたちは、野外入浴施設での貴重な体験に大歓声を上げていた。



⑦日目 災害食作り・キャンプファイヤー

今までの残りの食料と知識を使い、災害食作り。食材とにらめっこをしながら、できるだけ水を使わないようにして調理するにはどうすればよいか、グループで話し合いながら調理していた。最後の夜、みんなでキャンプファイヤーの火を囲み、7日間のキャンプでの互いの成長を共有しあいながら、楽しい夜を過ごした。



◆成果

- ①目的をもったフィールドワークや登山を行ったことで、活動のねらいである「自然の力」を感じることができた。
- ②災害時の考える困難を予想し、それを解決する知識を体験的に理解し、普段からの備えが必要だということに気付くことができた。また、普段から災害などにも関心をもつことにもつながった。
- ③食のありがたみ、水のありがたみ、電気のありがたみなど、当たり前なことが当たり前であることへの感謝の気持ちを感じることができた。
- ④集団生活を継続する中で、お互いが気持ちよく生活できるように協力したり思いやったりする態度の育成につながった。



◆参加者や保護者の声

- 泥流の恐ろしさを知って、迅速な避難が求められることがわかった。（小5 男）
- はじめは不安だったけど、色々貴重な体験ができてよかった。（小5 女）
- 頭ではわかっているけど、実際に体感してみないと、こんなにきついことはわからなかった。（中3 男）
- 災害のニュースが流れてきた時、自分に何ができるか考え、自分の学んできた知識を周りに伝えていきたいという話をしました。防災の意識がとても高まったと思います。（小5 母）

◆事業運営のツボ・工夫・反省

- ・様々ある自然災害の中でも、施設周辺のフィールドを生かせるよう火山に特化した想定で行った。
- ・「しおり」をなくし、日程を明かさないうことで、災害時に想定される「いつ何が起こるかわからない」状態異を作り、緊張感をもって生活をした。
- ・長期にわたるキャンプの中で、トライ&エラーを繰り返せるような日程を組んだ。

◆事業運営費 合計 529,939 円

旅費・交通費・・・198,757 円
講師謝金・・・142,027 円
体験活動費・・・38,712 円
広報費・・・150,443 円